公開講演会記録

「スーホの白い馬」の真実

通訳・翻訳家　ミンガド・ボラグ

1　「スーホの白い馬」とは？

モンゴルの民族楽器である馬頭琴の起源にまつわる話「スーホの白い馬」は、日本では子どもから大人まで世代を越えて広く知られている。１９６７年に福音館書店から『スーホの白い馬』（大塚勇三・再話、赤羽末吉・絵）という大型絵本が出版され（図１）、翌年からこの話は光村図書出版小学校国語教科書「こくご」（２・下）に掲載された。

現在、一般的に読まれている絵本『スーホの白い馬』の初版は１９６７年であるが、１９６１年に福音館書店発行の月刊絵本「こどものとも」10月号として発行された『スーホのしろいうま』が初出である（図２）。ただし、この『スーホのしろいうま』には馬頭琴という楽

図１

図２

器が登場しない。

教科書の場合、１９６８年度版（１９６８〜１９７０）と１９７１年度版（１９７１〜１９７３）では「白い馬」というタイトルで掲載されていたが、１９７４年度版から「スーホの白い馬」に変わり、現在に至る。また、教科書の挿絵は１９６８年度版から２００２年度版では赤羽末吉の絵が使われていたが、２００５年度版からリーリーシアン（李立祥）の絵に変わっている。

今回は拙書『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社、２０１６年）を中心に話を進めたい。

2　『スーホの白い馬』の出典について

驚くことは、この話はモンゴル民話だといいながら中国語で書かれた「馬頭琴」という話を日本語に翻訳する形で作られたものであることだ。これについて再話者の大塚勇三も、福音館書店の編集長だった松居直も様々な場面で話している。

では、大塚勇三は、この話をどこから入手したのか？　これについて私は大塚勇三本人に直接尋ねたことがあるが、本人は高齢のためほとんど覚えていなかった。だが、自ら中国語から日本語に翻訳したことや、絵本ではなく、分厚い書物を参考にしたことは話してくれた。大塚勇三のこの答えから考えられるのは、下記に示す３つの書物である。

『中国民間故事選』
作家出版社、１９５８年
『中国民間故事選』
人民文学出版社、１９５８年
『中国民間故事選』（第一集）
人民文学出版社、１９５９年

この３つの書物に中国人作家の塞野が整理した「馬頭琴」という話が掲載されている。書物の出版年や出版社が異なるものの掲載された「馬頭琴」の内容が完全に同じである。

なお、１９５６年４月に上海少年児童出版社から『馬頭琴――内蒙古民間故事』という本が刊行されているが、この本は全11話の約50頁のものである。また、この時代、連環画版『馬頭琴』も刊行されているが、大塚勇三の「絵本ではなく分厚い書物を参考にした」という答えから、これらの書物を参考にした可能性は低いと考えてよい。時をほぼ同じくして塞野が整理した「馬頭琴」の日本語訳が出ているが、大塚勇三の「自ら中国語から日本語に翻訳した」という話から、これらのテキストを使用した可能性も低くなる。

3　絵本『スーホの白い馬』の誕生秘話

絵本『スーホの白い馬』の誕生について福音館書店の編集長だった松居直や、その絵を描いた赤羽末吉が様々な回想を残している。それによれば、松居直編集長が「中国をはじめアジア各国の昔話を日本の子どもたちに紹介したい」と思っていた最中、赤羽末吉の方から「モンゴルのものを描きたい」という申し入れがあり、そこで大塚勇三の原稿が生まれたという。

では、なぜ赤羽末吉はモンゴルについて描きたかったのだろうか。戦前、内モンゴルの東部地域が、日本の傀儡国家だと言われている満洲国に編入されていて、赤羽末吉もそこで働いていた。

１９４３年に赤羽末吉とその絵描きの仲間が、関東軍の特務機関という組織の下請け仕事で内モンゴルの東北地域の王爺廟（現「ウランホト市」）に建設されたチンギス・ハーン廟の壁画を描くことになり、その準備調査として、一団は放

牧文化が盛んなシリンゴル草原を旅した。その旅がきっかけで赤羽末吉がモンゴル草原に魅了されたとのこと。

4 「スーホの白い馬」について調べたきっかけ

私は馬頭琴奏者でもある。来日後、南は沖縄から北は東北地方まで数多くの小学校で「スーホの白い馬」の学習の一環として馬頭琴の「出前授業」を実施してきた。こうして日本で「スーホの白い馬」の学習に関わってきたのだが、そうした日々のなかで「この話は一体どこからきた話なのか？」という疑問や違和感がこみ上げ、膨らんでいくようになった。

日本では一般的に「スーホの白い馬」はモンゴル民話だと受け止められている。しかし、モンゴル国はもちろん、中国内モンゴルにおいても「スーホの白い馬」といった話は存在しない。白馬を矢で殺す、といったことはモンゴル人にとってはあり得ない、極めて不自然な描写が多数散りばめられており、モンゴル民話というにははなはだ多くの疑問を感じる話である。何よりも驚きなのは、この話がモンゴル民話だといいながら、そもそもは中国語で書かれた「馬頭琴」という話を日本語に翻訳するという不自然な形で作られた話だということだ。

極めて不自然な描写の源流はこうした経緯にあるはずだ。そう思った私は、中国語の「馬頭琴」の整理者、塞野に聞くのが一番手っ取り早いと考えた。しかし、それはそう簡単ではなかった。「馬頭琴」が初めて書物に掲載されたのは1950年代であることを考えると、すでに整理者が亡くなっている可能性もあった。彼に関する有力な情報は得られないまま何年もの歳月が過ぎていった。そこで私は中国語の「馬頭琴」の舞台である「チャハル草原」を中心に調査することを決意し、現地に出向くことにした。

5 なぜ白馬を矢で殺すことは不自然な描写なのか

私が行った聞き取り調査の中で「馬が死ぬところが違う。モンゴル人は馬に対して特別な感情を抱いている民族であるから、どんなに悪い人でも馬を矢で殺すことはない。特に自分の好きな、しかもそんな立派な馬を矢で殺すことはあり得ない」など、白い馬の死に方に疑問を問いかけている人が多かった。その中、一人の厩務員の男性が、非常に鋭い指摘をしている。少し長くなるが、掲載しておこう。

これはモンゴル文化をよく知らない人が手を加えた話だと思う。実は、背中に鞍があり、手綱を引きずって逃げている馬は一瞬で捕まえることができる。馬は鞍と手綱が邪魔になって逃げにくいからね。背中に鞍がなく、手綱もなく、人も乗っていない裸の馬でも、人が馬に乗って追い掛ける場合は必ず追いつく。人は逃げている馬の動きをうまく読み取り、作戦を立てて追いつくことができるし、また裸の馬より、人が乗って走っている馬の方は、バランスがいいので走りが速い。だから必ず追いつくのである。要するに、逃げている白馬を矢で殺す必要はない。

原話では、白馬の死因は窒息死だったと思う。馬のことを知らない人には分からないだろうが、馬の長距離競走などの場合は、騎手が手綱をリズムよく引っ張ったり緩めたりして、馬が息をしやすくしないと馬が窒息することがある。というのは、馬をコントロールするために馬にハミ（馬銜）という金属製の棒状の物をくわえさせ、そのハミの両端が手綱に繋がっているので、馬は息をしにくいのである。だから、走っている最中、騎

手が手綱をリズムよく引っ張ったり緩めたりして両者が息を合わせないといけない。ところで、わしが昔聞いた話では、白馬に乗って馬の長距離競争に出場した主人が、この作業が上手にできなかったので白馬が窒息してしまった。それで、その主人が悔しさや悲しさのあまりに馬頭琴を作ったという話だったと思う。

私見であるが、おそらく窒息死だと物語が成立しないので、中国語版「馬頭琴」の整理者などによって「弓に打たれて死ぬ」というリアルな死に方に変えられたと思われる。モンゴルの歴史や文化について少し理解のある人なら必ず聞いたことがあると思うが、チンギス・ハーンやその後継者たちは、生き物をむやみに殺害することを固く禁じてきたし、今日もその習慣が固く守られている。例えば、１７０９年に書かれた、モンゴルの習慣法をまとめた書物である『ハルハ・ジルム』には「健康な（病気ではない、不具ではない、欠陥のない）馬、エジプト鵞鳥、蛇、蛙、野鳥（ブラマン鴨）、山鹿の仔、孔雀、犬などを殺してはならない。殺す者があれば、何人たるを問わず、目撃者をしてその人の馬１頭を没収せしめる」と事細かく規定されている。だから、いくら最悪の殿様（中国語版では「王爺」）であっても馬を矢で殺すとは考えられない。

引用中の「背中に鞍がなく、手綱もなく、人も乗っていない裸の馬でも、人が馬に乗って追い掛ける場合は必ず追いつく。（中略）裸の馬より、人が乗って走っている馬の方は、バランスがいいので走りが速い」という部分は、素人には少し難しい話だと思う。簡単に説明すると、乗馬用の馬の場合、毎日、人が乗ることによって、人が乗ってこそバランスが取れるようにできている。だから、人が乗っていないと、自動車で言う「重量バランス」が崩れるのでリズムよく走ることができなくなるということである。

6　「馬頭琴」にみられる不自然な点

モンゴル放牧文化の中で生まれ育ったモンゴル人なら誰もが、中国語版「馬頭琴」や、その翻訳とでも言うべき「スーホの白い馬」を読んで「何かが違う」と違和感を覚えるだろう。私もそのひとりだった。

ここでは、その調査の結果を踏まえて、「馬頭琴」にみられるモンゴル文化と矛盾する事象について述べたい。

第１に、スーホが仔馬と出会った時間帯が不自然である。「スーホの白い馬」では「ある日のことでした。日は、もう遠い山のむこうにしずみ、あたりは、ぐんぐんくらくなってくるのに、スーホが帰ってきません」と表現している。つまり、スーホが暗くなるまで草原で羊を放牧していたということになる。これが不自然である。というのは、羊は暗くなるとその場で群がり、鞭打ちをしても動こうとしない性質をもっているからだ。もし羊の群れが草原で宿泊したら、それこそ群ごと狼の餌食になるに違いない。それゆえに、羊飼いは朝になると羊を牧草地に連れて行き、日が沈む前に連れ戻すのだ。

第２に、白い馬が羊を守って狼とたたかうところが不自然である。草原では、馬の群れと狼の群れがたたかうことはよくあるが、馬が番犬のように、しかも囲いの中にいる羊を守って狼とたたかうことはまずない。

狼の食料となるネズミなどの小さな動物が冬眠した冬の草原では、狼の群れが羊や山羊といった小型家畜の群れを襲うことがよくあるが、馬や牛といった大型家畜の群れを襲うこともたびたびある。羊や山羊の場合は、ほとんど逃げることしかできないが、牛や馬の場合は、大人

が子どもを囲んで円を作り、種牛や種馬を中心とした力強い雄が円の外側で狼とたたかう。おそらく中国語版「馬頭琴」の整理者は、この話をヒントに、白い馬の賢さや主人との絆をより強調するために、このシーンを意図的に増やしたのであろう。

第3に、競馬大会が開かれた目的が不自然である。モンゴルでは、馬の長距離競争の乗り手は10歳前後の子どもであることが多い。モンゴルの馬の長距離競争は、日本の競馬と大きく異なる。広大な草原での20、30キロという長距離のコースが一般的である。だから、普通の大人が乗り手になると馬が持たない。

まれに大人が乗り手になることもあるが、現在、テレビや映画に出ている競馬の騎手を見ても分かるように、小柄で痩せている人でなければならない。要するに、これが「一等になったものは、殿様の娘と結婚させる」という部分に矛盾を感じる。乗り手が子どもの場合は、当然、結婚相手にならない。百歩譲って、乗り手が大人だったとしよう。だが、殿様が痩せ細った小柄の乗り手たちの中から娘の結婚相手を選ぶとは、普通は考えられない。これはおそらく、馬の長距離競走の1等になった乗り手は、西洋の神話などによく登場する白馬に乗った王子様のような格好よく、逞しい男であるというイメージを前提に、「一等になったものは、殿様の娘と結婚させる」となったと思われる。つまり、これは移植されたものであり、そこに「創作文学」の匂いがする。

第4に、大会が開かれた時期が不自然である。「馬頭琴」では、馬の長距離競争を開いた季節が「春」となっているが、モンゴルでは馬の長距離競争を夏季に行う。これは常識である。

モンゴル草原では、春には仔馬に焼印を押し、3歳の雄馬を去勢する大仕事がある。これが力仕事でもあるがゆえに、地域ぐるみで行うことが多く、若者が中心に活躍する。この時、元気な若者たちは遊びとして馬に乗って競争したりして長老に怒られることがよくある。というのは、厳しい冬を超えたばかりである上、牧草も少ないので、春季はすべての家畜が痩せ細っている。その時期に馬を走らせすぎると、馬の体内時計が狂ってしまい、脂肪を貯えることができなくなる。だから、モンゴルでは、春期に馬をあまり走らせてはいけないことになっている。

以上のように、中国語版「馬頭琴」やその翻訳とでも言うべき「スーホの白い馬」にはモンゴルの文化や習慣と矛盾する点が多くみられる。民話にはオーバーな表現が用いられることはよくあるが、だからといって、その民族の文化や習慣、歴史と矛盾することはあまりないだろう。その意味で中国語版「馬頭琴」には、確かに「創作文学」としての一面がある。ただ、民話をベースにしているゆえに、白い馬と主人の絆という、原話の「白い馬の物語」ならびに「馬頭琴の伝説」の本来の面影とでも言うべき文化的側面は活かされている。

なお、「スーホの白い馬」では、話の舞台を「中国の北の方、モンゴル」としているが、原話である中国語版「馬頭琴」では「チャハル草原」としている。また、「スーホの白い馬」では「殿様」としているが、「馬頭琴」では「王爺」になっている。

ところが、「馬頭琴」の舞台であるチャハル草原には世襲制爵位である「王様」、つまり「スーホの白い馬」でおなじみの殿様はいなかったのである。これが中国語版「馬頭琴」の最大のミスである。

なぜ、中国語版「馬頭琴」の舞台であるチャハル草原には世襲制爵位である「王様」はいなかったのか。それにはこ

のような歴史的背景がある。

１６９１年に清朝康熙帝が自ら取り仕切ったドロン・ノール会盟によってモンゴル人は清朝政権に臣従した。その会盟の際、康熙帝はモンゴル古来のノヤンやジョノンといった爵位を廃止し、モンゴル草原の王族に世襲制爵位である和碩親王（ホショイチンワン）、多羅郡王（トルイインジュンワン）、多羅貝勒（トルイインベール）、固山貝子（ホショーベース）、鎮国公（オルスイントクチェクン）、輔国公（オルスイントクタクチクン）を与えて統率を図った。この世襲制爵位は清朝宗室に準じるものであり、必ずチンギス・ハーンの直系子孫でなければならなかった。

その一方、清朝政権はチャハル草原の八つの旗（ホショー）（行政単位）において総管（アバン）、正参領（ジャラン）、副参領（イリクジャラン）、旗の管轄内におけるソムにおいて佐領（ジャングン）、驍騎校（フンド）、護軍校（ジョワンダ）による統率といった非世襲制役人による独特な行政仕組みを導入した。それは、チンギス・ハーンの22代目の子孫に当たる、モンゴル草原の最後の皇帝リグドン・ハーンが率いるチャハル・モンゴル人は、満洲人が勃興して清朝を建立しようとした時から徹底的に抵抗した上、清朝が成立した後も蜂起を繰り返してきたからである。

7　「馬頭琴」は何を訴えたかったのか？

すでに述べたように中国語版「馬頭琴」にはモンゴルの文化や習慣、歴史と矛盾する点も多くみられることから、中国語版「馬頭琴」自体が、モンゴル文化に関する断片的な知識に基づいて手を加えられた話であることが分かった。

つまり、「スーホの白い馬」の原典である中国語版「馬頭琴」は、モンゴルの伝統社会において、口承により代々伝えられてきた民話ではなく、モンゴルの民話をもとに作られた「創作」である。大塚勇三はこのことを充分に理解せず、中国語版「馬頭琴」を日本人向けにアレンジ・翻訳する形で「スーホの白い馬」を作成したのである。その意味において、日本で読まれている「スーホの白い馬」は「再再創作」であると言える。それを関係者らも気付かなかったようである。

では、中国語版「馬頭琴」は何を訴えたかったのか。１９５６年に刊行された『馬頭琴――内蒙古民間故事』の前書きに「本書はモンゴル民族の民間故事を集めたものである。これらの話の中では、モンゴル人同胞が受けている階級の圧迫や彼らの統治階級への憎しみや反抗が表現されている。本書に所収されている『馬頭琴』や『バイリン地域の力士』に、それがあらわれている」とある。

つまり、この話は「無産階級」のスーホと、「搾取階級」の殿様を対立させて描くことによって、殿様のような支配者・牧場主・富裕層は「搾取階級」であり、「悪」であるので絶対に倒さなければならないという階級闘争の思想のもとで創作された話である。ゆえに、「馬頭琴」ならびに「スーホの白い馬」では、「スーホという、まずしいひつじかいの少年がいました」「つれてこられた少年を見ると、まずしいみなりのひつじかいではありませんか」「なんだと、ただのひつじかいが……」（教科書）、または「なんだと！　いやしいひつじかいのくせに……」（絵本）というように、やたらにスーホが「貧しい羊飼い」であることが強調されている。これはつまり、スーホは「無産階級」であるということを強調している。一方、殿様はそのスーホを見下しているだけではなく、スーホの馬を奪い、しかも馬を残酷に殺す「悪い奴」として描かれている。これはつまり、殿様は「搾取階級」であるということを意味している。

結論を言うと、日本で読まれている「スーホの白い馬」は、単なる白馬と主人の間における愛と絆の物語などではなく、民間説話によくみられるような上流

階級と下流階級の対立の話でもない。この話は勧善懲悪をストーリーの骨子とし、無産階級のスーホを「善役」、有産階級の殿様を「悪役」として表現し、貧しい牧童の馬を奪い、しかも立派な白馬まで残酷に殺す殿様は支配者・富裕層、つまり「搾取階級」で「悪」である、したがって絶対に打倒しなければならないという、社会主義体制に宿る革命の意義や階級闘争的な視座に根差した特定の社会思想、政治思想によって生み出された話なのである。

8　なぜ階級闘争が必要だったのか？

では、なぜ階級闘争をする必要があったのか。ここでは、中国語版「馬頭琴」が創作された１９５０年代前後の内モンゴルの社会情勢をみることによって、その理由を探る。

当時、内モンゴルの最高指導者であったウランフーをはじめとする多くのモンゴル人政治家は、内モンゴルにおける民族構成や社会構造、階層構造、経済構造などは、漢人の地域と完全に異なるゆえに、プロレタリアートは存在しないという立場を取っており、内モンゴルにおいて中国共産党が行う土地政策を伴う階級闘争に反対だった。

このように内モンゴルの指導者らが、牧畜地域にはプロレタリアートは存在しないという立場を取っていたことの背後には、モンゴル牧畜民特有の生活スタイルがある。すなわち、遊牧という生活スタイルにより、使用人は広大な草原を家畜とともに移動する生活を送っていた。それは少なくとも、白馬に跨がって草原を自由に駆けるスーホのように精神的にも身体的にも縛りがなく、自由な生活を送っていたことを意味する。もちろん、モンゴル牧畜地域でも、支配者・牧場主・富裕層が多くの家畜を擁し、大勢の牧畜民を使用人として使ってはいたが、支配者・牧場主・富裕層も移動する生活を営んでいたので、使用人を毎日のように監視することは不可能だった。

また、当時の民衆は本当に心の底から殿様のような支配者・牧場主・富裕層らを憎んでいたのかといえば実はそうでもなかった。「スーホの白い馬」にあるように、馬の長距離競走の大会で優勝した者を殿様が花婿にするという話を聞いて、スーホに白い馬に乗って大会に出るようにすすめた周りのモンゴル人や、その話を聞いて迷わず大会に出場したスーホの行動には、殿様に対する憎しみというより、むしろ憧れがみられる。本当に両者の間に憎しみが存在していれば、スーホの周りの人々は、スーホに白い馬に乗って大会に出るようにすすめるわけがなく、スーホも大会に参加するはずがない。

当時、一部の支配階級は巨万の家畜を擁し、特権を握っていたことは確かであるが、彼らは地域の象徴としての存在でもあり、教育を受ける機会にも恵まれていたので、彼らの中に進歩的な考えを持つ者も多かった。なにより彼らの絶対的権力は外部からきた漢人たちにも有効であった。

草原で畑を耕す土地が欲しい漢人農民や、活動の基盤を拡大したい中国共産党にとって、このような支配階級は目障りだった。力で抑えることもできたが、そうすれば逆にモンゴル人の心をつかむことができなくなる。そこで考えたのは、あいつら（支配階級）のせいでお前らが貧しくなったなど、貧しいモンゴル人を煽り、彼らを使って支配階級を倒す方法である。そうすればモンゴル草原を「大衆」、つまり、侵入者である漢人農民にも平等に分け与えることができる。これがいわゆる土地改革を伴う階級闘争の狙いであった。そのために、民衆を煽る必

要があったし、自分たちがやっている「正義」をプロパガンダする必要もあった。

このような政治的・思想的イデオロギーの対立を背景にして、「馬頭琴」という話は、内モンゴルの草原のような牧畜地域にも、殿様のような支配者・牧場主・富裕層がいれば、スーホのような貧しい羊飼いがおり、階級は存在する、という社会主義的発想のもとで作られたものであった。

9　むすびにかえて

私は２０１６年に『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社）を出版した。出版は大いに話題にはなったのだが、「スーホの白い馬」が来日してから約60年が経過していることもあって、多くの日本人の頭に刻み込まれた「スーホの白い馬」＝モンゴル民話という図式を崩すには至らなかった。

やはり整理者の塞野に直接会って話が聞きたい。そうした思いは強まるばかりだったが、その願いはやがてかなえられた。今年88歳を迎える塞野は、内モンゴルの地方の町でひっそりと暮らしており、めぐり会うことができたのだ。

２０１８年４月、私は塞野（本名「楊蔭林」１９３２年生まれ、漢族）を訪れた。その時、彼は中国語の「馬頭琴」について「この話は１９５１年頃、小学校で教員として働いていた時に採集し、１９５４年の年末頃、整理し、作品化して『馬頭琴』というタイトルを付けて『内蒙古日報』の副刊（文芸・学芸欄）に投稿した。そこでさらに加筆・修正されて掲載された」とオリジナルの話ではないことを認めた。

これによって「スーホの白い馬」は、伝統社会で成立して口承によって伝えられてきた、いわゆる民話ではなく、中華人民共和国の成立後、強いイデオロギーの影響の下でモンゴルの民話をもとに新たに創作された「新民話」であることが証明されたのだ。

最後に改めて強調しておきたいが、これは何かイデオロギーに基づいて書かれたものではなく、「スーホの白い馬」やその原話である中国語版「馬頭琴」の整理者や彼らの功績を否定することでもない。ましてや「スーホの白い馬」を教科書から削除しようとしていることではない。真実に基づいたドキュメンタリーを、草原で家畜を放牧しながら育った一人のモンゴル人研究者の視点から描いたものである。

（２０２０年２月６日・公開フォーラム）

筆者略歴（ミンガド　ボラグ）

中国内モンゴル自治区シリンゴル草原生まれ。１９９５年、教員養成学校であるシリンゴル盟蒙古師範学校を卒業。１９９９年に来日、日本語学校を経て２００１年に関西学院大学文学部に入学。２０１１年、関西学院大学教育学研究科博士課程後期課程修了。博士（教育学）。現在は非常勤講師・翻訳・通訳者として働く傍ら馬頭琴奏者としても活躍する。

著書に『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社、２０１６年。第41回日本児童文学学会奨励賞受賞）、『草はらに葬られた記憶「日本特務」――日本人による「内モンゴル工作」とモンゴル人による「対日協力」の光と影』（関西学院大学出版会、２０１９年。第７回日本研究奨励賞受賞）などがある。そのほか論文・翻訳多数あり。